

氏名	古郡 紗弥香
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲 第 188 号
学位授与年月日	2015年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	イメージ化された売茶翁 —江戸時代後期における文人表象— (Images of Baisao: Cultural Production in Late Edo Literati Culture)
論文審査委員	主査 特任教授 リチャード L. ウィルソン 副査 客員上級准教授 ミリアム ワトルズ 副査 教授 小島 康 敬 副査 教授 古藤 友 子

論文内容の要旨

本論文は、江戸後期の黄檗僧、文人である売茶翁（1675～1763年）の表象を対象とし、彼に対するイメージの形成と変化の過程を追うものである。その特徴は、売茶翁の実像を対象とした先行研究とは異なり、表象の形成と変化という文化生産の過程を追うところにある。

具体的方法としては、売茶翁の表象を伝える媒体を四種（テキスト、絵画及び画像、物、パフォーマンス）に分け、それぞれ章をもうけた。そして、売茶翁が、文化的ヒーローとして広く認められるようになるまでの過程を追いながら、表象の変遷を分析した。

売茶翁は、蓮池藩（現在の佐賀県）に生まれ、11歳から67歳で還俗するまで黄檗僧であった。若い頃に厳しい修行を積み、将来が期待されていたと考えられるが、50代で近畿に移り住み、黄檗僧や文人たちと交遊を深め、1735年ごろには売茶翁として、名所での茶売りを始めている。名所で煎茶を売ることは以前からあったが、売茶翁はそこに中国の文人スタイルの煎茶を持ち込み、知識人による露天の茶売りは有名になった。売茶翁の茶売り行為自体、表象の記号に満ちたものだったが、その姿を世に広く伝えたのは、売茶翁没後に、多くの人々によって形成され、変化して、多様な広がりを見せた売茶翁の表象であった。1755年に腰を悪くして茶売りをやめた後は、揮毫によって生計をたてながら、心おきない仲間たちと交流しつつ暮らしたようである。

売茶翁の伝記的事項は、先行研究によって明らかにされている。一方で、売茶翁の表象に注目すると、興味深いのは、売茶翁の人物像が形成され変化していく中で、かえってその没後になって、イメージが巨大化し広く浸透していくことだ。この現象を、ヒーロー論や表象論の方法論を参考にし、「文化的ヒーロー (cultural hero)」という概念を使って分析した。「文化的ヒーロー」とは、本論文の分析上の必要から設定した概念で、筆者の造語である。この語を、「所属する文化的価値体系の中で認められている何らかの価値を体現していると判断された存在」と定義する。重要なのは、「文化的ヒーロー」が文化的な記憶の蓄積によって形成された理想的人物イメージの類型と、その類型に当てはめて文化的ヒーローとして受容された人物である点だ。つまり、文化的ヒーローであるかどうかの分別は、受け取り手の価値観に大きく依存する。

この論文では、売茶翁の表象を伝える媒体を、テキスト・絵画と画像・物・パフォーマンスの四つに分け、それぞれの媒体ごとに特徴的な表象表現の伝統と、その売茶翁表象への適用及び創造の様子を追った。その分析の過程で見えてきたのは、売茶翁表象の形成および変化とその浸透の結果として起った売茶翁の称揚は、当時の文人たちの思想や価値観をあぶりだし、社会状況の変化を敏感に反映しているということだった。

第一章テキストでは、まず、隠逸のイメージの浸透を背景として、売茶翁や友人たちが、売茶翁の表象を形成したことを、中国と日本における先例とともに確認した。売茶翁の没後しばらく、彼のイメージは、売茶翁と友人たちの提示した表象に基づいて、黄檗僧として身につけた教養や才気を長所とする隠逸の者として伝統的価値観に基づいて描写された。しかし、文人たちを取り巻く環境はジレンマを生み出しており、文人たちは自分たちの現状にふさわしいロールモデルを求めはじめる。文人たちは大衆文化の振興とともに生きることに葛藤を抱えていたが、それは明清時代の中国の文人たちが陥った状況でもあった。日本の文人たちは、中国の「童心説」などを参考に、真情に従うことを肯定し、伴蒿蹊はそれを「畸」という価値基準として提示し、伝記集を編んだ。伴蒿蹊は、その中で売茶翁を、思うところに従い、地位も名誉もある立場を放棄して、一介の茶売りとなった者として、「畸人」の代表とし、積極的に評価した。ここにいたって、売茶翁は新しい表象として生まれなおした。伝統的な価値と新しい価値を得て、表象の幅を広げた売茶翁は、「煎茶」や「名家」という表象のバリエーションも得ることが可能になった。「煎茶」は19世紀に入り、煎茶愛好者が増加し、煎茶書によってその歴史が創成される中で、日本の煎茶の中興として位置づけられて神格化していった、煎茶の神としての売茶翁である。また、「名家」とは、印刷出版業の隆盛の中で、19世紀半ば以降、読者の興味の求めに応じ、知名度の高い人物に対する興味を満たすという出版側の思惑によって作り出された表象の類型である。そこでは、畸人や煎茶の翁として有名になった売茶翁が、有名人としての意味づけ以外を剥奪した形で提示される。

第二章で扱うのは、絵画と画像に表現された表象だ。売茶翁は、池大雅や伊藤若冲を始めとして、三熊思孝や田能村竹田、谷文晁、渡辺華山、富岡鉄斎など数々の文人によって描かれている。人物の画像の中でも、売茶翁の表象の形成と浸透の素地になったと考えられるのは、禅の悟りの契機や禅問答の様子を描いた禅機図や漁樵を描いた文人の絵画である。漁樵は、優れた素質を持ちながら、あえて身をやつし、市井にまぎれて暮らす人々で、伝記逸話を伴う人物像の一類型である。これらの画題は、すでに五山僧の絵画や画譜類を通じてイメージとして浸透していた。

売茶翁を描いた像に特徴的なのは、第一に、しわが深く刻まれた顔、髪やひげのぼさばさに伸ばし、鶴氈衣を着た風貌である。これは、売茶翁や友人たちが『売茶翁偈語』における売茶翁の描写と重なる。第二に、当時の一般的な肖像画とは異なり、売茶中または売茶に関わる行為中を描くところにある。これらの特徴は、禅機図や漁樵図のイメージを受け継ぎ、その尊さを、売茶翁にも視覚的なイメージを通じて転写するものであった。

一方で、日本には、聖徳太子像や柿本人麻呂像のように、逸話と深く関わる姿で描かれ、尊崇や祈りの対象、そして、描かれる者にあやかる効果をもたらす機能を肖像画にも足せることが行われてきた。売茶翁が茶売りの姿で描かれたことから、一般的な肖像画とは異なり、尊崇をこめて、文人の好む画題の一つになっていたことが伺える。

ところが、後に異種百人一首や浮世絵に描かれる売茶翁像を見ると、抹茶を立てる姿や僧侶の姿で描かれており、名家となった売茶翁が、「茶」に関わる者という特徴をのこして形骸化したイメージとなっていたことが分かる。

第三章では、物と結びついて、または物を通じて表象される売茶翁のイメージを扱った。仏舎利の例に見られるように、東アジアには古来より物に自分の属する系譜の正統性を保障する機能が見出されてきた。そして、茶の湯の茶器の生産において「利休好み」の確立という形で利休が果たした役割を、結果的に売茶翁も担うこととなった。それを示すのは特に19世紀半ば以降の煎茶書に載る売茶翁の茶道具の描写や挿図である。

売茶翁の煎茶道具を保有することは、持ち主が煎茶の歴史上正統な系譜を受け継ぐことを保障し、逆にそれによって、煎茶人としての売茶翁表象の力を強める働きを持っていた。そして、売茶翁の茶器は、煎茶愛好家の数が増加するとともに、煎茶器のスタンダードの一つとして、陶器生産という経済活動のために活用されていった。また、売茶翁の煎茶人としての表象は、売茶翁の表象の中で、尊崇の度合いが最も強く、また後世まで残った表象である。それは、煎茶に親しむ者が組織化され、強い基盤を持つことができたからだろう。そして、組織化への過程において、中興の祖とされたのが売茶翁である。

第四章では、パフォーマンスを扱う。文人にとって、パフォーマンスはさまざまな意味で文人としてのアイデンティティを確立するための重要な場であった。また、テキスト・絵画と画像・物という三つのメディアを通じて表現された売茶翁像はパフォーマンスを通

して表現されたときにより強い力を発揮した。そのため、売茶翁がパフォーマンスを通じてどう作られ、語られ、拡散し、変化を重ねたかを知ることが、文人文化における表象の問題を考える上でも重要である。

売茶翁と友人たちは、集い、語らい、詩を応酬し、煎茶を飲むという行動を共にすることで、文人らしい価値観を共有し、また、自分たちの行為を古の文人による集いと重ね合わせることで、理想化した表象を築いていった。それを形にしたものが『売茶翁偈語』である。

しかし、本来は縛りのない共感の場であった文人の集いが、次第に、目的が定まり、集う時と場が固定化し、ルールが設けられ、集いの形が日本化していった。集いの形に象徴されるのは、文人の在り方が中国の古代の文人たちとの相違である。それがより鮮明になるにつれ、文人たちはジレンマを抱えるようになる。伴蒿蹊と友人たちが、売茶翁を代表として『近世畸人伝』に見られる人物像を提示したのも、文人によるアイデンティティ模索の動きの一つであった。

文人の集いの形が変化する中で、煎茶を契機にした文人の集いも形式化が進む。煎茶の家元が出現し、系譜の正当性が問われる状況が生まれると、売茶翁は煎茶の中興として尊重され、系統の正統性を保障する機能を担うようになっていった。

また、それに平行して盛り場における見世物や歌舞伎などといった人々の視覚を中心とする五感に訴える公開されたスペクタクルの存在は、文人による公開スペクタクルである書画会への道をひらいた。煎茶を契機とする集いも、鑑賞者と演じ手が分化していく。青湾茶会は、売茶翁の表象をシンボルとして開催された大寄せの煎茶会である。すでに、売茶翁は文化的ヒーローとして、1,200人がつめかけたというこの煎茶会は、巨大な煎茶会を纏め上げるイメージの力を獲得していたのである。

先行研究は、対象となる人物の実像を追求してきた。それによって、明らかになった伝記的事実は数多くあり、現在の文人研究の基盤となっているが、文人を理解しようとするとき、伝記的事実からの分析のみでは、文人の大事な面を見落としてしまうと筆者は考える。また、文人の描写による文人理解は、彼らの生み出したイメージを通して文人を理解することに繋がるが、逆に、文人の生み出した表象自体を分析の対象とすることで、文人の思想や価値観を知ることができる。本論文は売茶翁の表象の形成と変化を通じて、文人の理想とその変化、そして現実との葛藤と対処の様子を分析した。現在では、煎茶の売茶翁という表象に収斂したとみえる売茶翁のイメージは、江戸時代には、隠逸・漁樵・畸人・名家というさまざまな顔を持っていた。この表象の豊かさが売茶翁を文化的ヒーローとして成り立たせていた基盤である。その豊かさは、受容する者の状況と価値観に合うような文化的ヒーローとして語られ、そして、受容者に受け入れられるなかで生み出された多様性であった。つまり、個人的な性質や才能、業績の「優劣」によるのではなく、その人物

が、ふさわしい表象で語られ、受け入れられたためであったといえる。

論文審査結果の要旨

2015年1月23日古郡紗弥香氏の博士論文審査が、Richard L. Wilson、Miriam Wattles (University of California-Santa Barbara)、小島康敬、古藤友子の教授四名で構成される審査委員会によって開かれた。審査は、まず古郡氏による研究成果の要約と中間審査の指摘に対し、どのように改善が行われたかの説明から始まった。続いて各審査委員による質問とコメントが行われた。

2014年5月23日に行われた中間審査では、大きく分けて以下の指摘がなされた。第一に論文を貫く論理の筋道に強度を持たせること。特に、さまざまなタイプの売茶翁イメージの事例が論文の中で体系的に位置づけられることが重要である。第二に売茶翁の表象と明末清初の中国文人文化の展開との関連を盛り込むこと。第三に、『売茶翁偈語』の刊年である売茶翁の没年から、『近世畸人伝』の刊行までの数十年間に展開された売茶翁表象の様相を明らかにすること。第四に、構成や文章の書き方に修正が加えられるべきであること。以上の4点であった。

2015年1月23日の審査において、審査委員は、これらの中間審査で指摘された課題が、最終版においてはほぼ解消されている、という点で合意した。ただし、更なる改善やこれからの研究の展望について、各審査委員から意見が出された。第一に、外部審査委員であるワトルズ教授は、論文の構成には強度があるが、一方で、分析にはより強度が必要だと指摘した。文化的ヒーローの表象が形成されるメカニズムに関するより深い考察が必要だということ。パフォーマンスの章が扱う内容について、研究を深めることで、文化的ヒーローの表象が形成されるメカニズムの働きがより明快になることが、より理想的な展開であるとのことだ。歴史家として、どのようにパフォーマンスを扱うか考える際には注意が必要である。その際に、人々とその作品の違いを丁寧に扱う必要がある。第三章「物」で、この論文の取った分析方法ではパフォーマンスとの関係で扱いづらい部分が出てくるので、物質文化論が助けになるだろう。例えば、美術史家の大西廣氏は、「場」を使った論を展開している。また、「ヒーロー」という語をキーコンセプトとして使用しているが、論文内での定義およびカタカナ語にした理由が示されているとはいえ、この語は特定の人物類型と結びついた印象を読者に与えると考えられるので、避けたほうが無難である。もし、英語由来の語を使うとすれば、「ペルソナ」の語が適切であろう。

古藤教授は第一に文書の配置が読みづらくしていること、第二に、日本の文人の価値観にある文化的ヒーローのステレオタイプについて語るならば、中国の文人のもつステレオ

タイプについても注意を払い、それらの異同を示すべきである、と指摘した。されに、日本には科挙がない、などの日中の文人のおかれた社会構造・制度の違いといった基本的な事項についての言及を省かずに、明確に言葉にすべきであり、それがより深い分析にも繋がると説いた。

小島教授は、第一に、副題の「江戸時代後期における文人表象」について、売茶翁に関する表象を、江戸後期のすべての文人の代表として取り上げたという意味に取れるが、それが筆者本来の意図かどうかを問うた。第二に、「ヒーロー」の語は、日本語にも英語にも特定のニュアンスを伴うので、売茶翁のイメージに当てはめるのに最適の語ではないと指摘した。第三に、売茶翁の実像を求めることを避けるという、博論の中心となる発想について、より徹底した議論が必要とされる。思想史の分野で求められるのは、資料の内に表現された精神をすくいとることであり、異なる方法論をとる場合には、明確な説明がなされるべきである。最後に、本文には多くの繰り返しがあり、よりタイトな形にできる、という指摘があった。

ウィルソン教授は、他の審査委員と同じように、中間報告の際にあった、主な問題点は解決されたと認める。しかしながら、第一章「テキスト」では、より多くの事例を示すことによって深い分析が可能になり、博論がさらに豊かにすることが可能だと指摘した。第三章「物」は、18世紀末から19世紀初頭の社会状況との関わり、とくに急拡大する美術市場を考慮に入れるべきである。第四章「パフォーマンス」では、歴史的な背景のいくつかの説明されているものの、文人のパフォーマンスの中心的モデルに欠けているものがある。それは、17世紀後半の黄檗の記録であり、特に、黄檗僧の富裕商人宅への訪問記のテキスト資料を使えば、どのようにテキストと物と人々のつながりが協働して伝統的モデルとなり、売茶翁を生み出したか、その様子が描けるであろう、と指摘した。

上記のさまざまな質問と改善点が挙げられ、議論されたが、審査委員は古郡氏の研究は、売茶翁と彼の遺産に対する学問的理解に貢献するだけの質に到達していると結論付けた。

2015年1月23日、11時30分から13時までの審査及び最終判断が、国際基督教大学教育研究棟257教室において行われた。提出された論文は、博士論文として十分な内容と方法を備え、審査対象者は独立した上級の研究能力を有する。したがって、満場一致で提出された論文を博士論文と認める。